

---

# ロックバード      空を奪われた翼

志信

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロックバード

空を奪われた翼

### 【Nコード】

N4781B

### 【作者名】

志信

### 【あらすじ】

操縦士の技術低下。信用の失墜。対空兵器の台頭。避けようのない時代の流れに、翼は空を奪われた。進歩する対空兵器に居場所を追われ、社会から切り捨てられていく飛行機乗り達の物語。

## プロローグ

心臓が締められたような圧迫感を感じたが、それは決して不快ではない。

奇妙な感触が伝える予感を少しも疑わず、青年は小さく首を回してゴ―グル越しの景色を見渡す。

頭上には青い空が広がり、前方も青い空に覆われ、下方にまでも青い空が見えた。その下によりやく草原がある。

精巧な模型にしか見えない緑の大地では、人形のような牛飼いが犬を連れてこちらを見上げていた。

やがて青年の目は、空の一箇所を捉えて細まる。

一羽の鳥が旋回していた。遠目にもそれとわかる鋭い鉤爪を持った、鷲とも鷹ともつかない茶色の鳥。

大きな翼を真つ直ぐ伸ばして空を滑り、歪みのない軌道で円を描く。あの鳥の真下にいたなら、コンパスでも使ったかのように狂いのない正円の軌跡を拝むことができただろう。

鳥の遠影を真正面に据えようと青年がやや左上を向けば、

鳥は唐突に翼を羽ばたかせ、自ら描いていた美しい円をためらいなく崩してしまった。

舞い上がった鳥は青年に横腹を向け、視界の右側へ外れようとする。別に青年から逃げようとしているわけではない。鳥は見つけたのだ。自らの獲物を。

加速する鳥の視線を目で追えば、そこに派手な塗装を施された飛行機が飛んでいることに気付ける。

「……小さいな」

プロペラを唸らせる飛行機の第一印象は、そのまま青年の口をついた。

誰だってそう思う。鳥の大きさを小指の先とするなら、飛行機の大さは親指の先程度。

どこの子供が飛ばしたおもちゃなのか、紙飛行機並に小さな飛行機だ。

「小さいな」

もう一度つぶやき、青年は鳥から逃げる飛行機の風防に目を向ける。青年は目が良い。

人が乗れるはずもない超小型飛行機の操縦席でひっきりなしに後ろを確認している操縦士の姿を、はっきりと視認していた。

青年は左足のペダルを踏み込み、右手で握っていた操縦桿を手前に引き付け、スロットルを全開した。

青年の飛行機はすーっ、と左に曲がり、機首を持ち上げて傾き、そのまま加速を始める。

首を回さずとも正面に映るようになった鳥は、

小さな飛行機に追い付いたかと思えば、いともあっさりとそれを握り潰してしまう。

両足の鉤爪から燃料と機体の破片がこぼれ落ちる。鳥が飛行機だった鉄屑を放り捨てて三秒、爆発が起こった。

## 1、橙色の戦闘機

「ステイプ！ 脱出しろ、ステイプ！」

アラン・アンサルドは悲痛な声をあげた。

風防の片隅に咲いた炎の花が、長い付き合いだった級友の最期を彩っていた。荒く通信機を操作する。

「……アランだ！ステイプは脱出できたのか？ 確認した奴はいないか？」

いくら待っても返答はない。誰も何も言わなかったが、その沈黙は何よりステイプの結末を雄弁に物語っている。

手の震えが伝わらないよう、操縦桿を握る力を少しだけ緩めたアラン。別の仲間の声が、イヤホンを通して彼の耳に届いた。

『アラン、悲しいのは俺達だって同じだ。今すべきことは』

「わかってる！くそっ！」

アランは感情に流されやすい男だった。

悪態について再び操縦桿を握り締めた彼の目には、ステイプ機をやすやすと握り潰した一羽の鳥が映っている。

畏怖の念を感じずにはいられない雄大な翼に似合わず、つぶらな黒い瞳が可愛いその鳥は、しかし鳥と呼ぶには巨大すぎた。

嘴の先から尾の先端までの距離がちょうど、飛行機のプロペラの先から尾翼の先端までの距離と一致する。

鳥は地に落ちた飛行機の残骸から立ち昇る黒煙を見物するように飛んでいたが、

やがて煙への興味を失ったのか大きく体を傾け、緩やかに左へ曲がり始めた。

「来るぞ！作戦変更、まずは俺が仕掛ける。後に続いてくれ」

『アラン、ロングボウはどうする？ 乱戦に入るとネットが撃てない』

「一応、いつでも撃てる状態で待機しておいてくれ。ロックには近寄るなよ」

『了解だ』

指示を飛ばしているのがアランだとわかったわけでもないだろうが、鳥はアランの声に合わせて旋回を止めていた。

そして飛んでくる。翼で空気を叩き、みるみる加速するブラウンの巨躯。

エンジン音にも掻き消されない力強い羽音がアランの耳に届く。

秒刻みで強まっていく威圧感。

「仇は取ってやる……！」

アランは深く息を吸い込むと、気合いとともにスロットルレバーを押し込んで叫んだ。

「さあ、行くぞ！各機散開！」

喉に巻き付けたマイクがアランの声を拾い、それを聞いた仲間達がそれぞれに雄叫びを上げる。

V字の編隊を組んでいた飛行機は六が二、小が六の八機。どれも例外なく派手好みに塗り飾られていたが、色使いや構図には統一性がない。

まるでそれぞれが自らの存在を誇示しがっているかのようだ。

八機の飛行機は、図ったように同じタイミングで空を滑る。

まず最前列を飛んでいた二機が左右に傾き、突っ込んでくる鳥を避けるように曲がった。

他の六機より一回り大きな機体の、どこか不格好で鈍重な急旋回。

次いで加速した五機の小型飛行機が軽やかに前方の二機を追い抜き、思い思いの位置に散らばっていく。

そしてアランは鳥の予想到達点に取り残された。

白地に赤で炎の絵が描かれた機体の操縦席から、すでに鳥の目線までも見て取ることができる。

鳥の目は間違いなく彼を、彼の乗る飛行機を捉えていた。

アランは微妙に機体の向きを調節する。アランと鳥との間に、照準機の十字が割り込んでくる。

「落ちろ、ロクク！」

アランは操縦桿上部、機銃の発射レバーに指をかけるとためらいなく引いた。

主翼下部に取り付けられた機銃が火を吹く。離れた位置で交差して伸びる二本の火線は、しかし鳥を撃ち抜くことはない。

鳥が何かをしている様子はないのに、照準が微妙に狂い、弾が当たらないのだ。

機銃が何かトラブルを起こしたのかも知れない。アランは毒づきながらも狙いを定め直す。

「くそつ、今度こそ」

『アランっ！』

アランの耳に飛び込む仲間の声。射線軸上に鳥を捉えることだけに集中していたアランは

目前に接近していた鳥に驚き、反射的に操縦桿を引き起こす。

唐突に上昇した紅白の飛行機の真下を、間髪いれずに鋭い嘴が駆け抜けた。

『アラン、無茶はするな！』

「すまない、助かった！」

通信に叫び返ししながら、アランは乱暴な操縦で飛び去った鳥を追う。速度を落としてつ、左に旋回。傾いた機体の中で首を捻ると、仲間の飛行機に集中砲火を浴びている鳥が見えた。

同時に、それが対した戦果を挙げていないということも確認してしまう。

飛び交う五機の飛行機から放たれる弾丸を、鳥はひらりひらりかわしている。

アランは歯噛みした。自分達の腕ではとうていあの鳥を仕留めることなどできない、そんな弱気な思いが頭を過ぎる。

「くそつ……」

苛立ち紛れに機体を水平に戻すアラン。鳥は適当な一機に狙いを定め直したようだ、

それを囷に攻撃するには、アランと鳥に距離がある。アランはスロツトルレバーに手を伸ばし、

『こちらジエームズ！大変だ、所属不明の飛行機が一機、そっちに向かつてる！』

「何？」

前触れもなく知らされた緊急事態に目を丸くした。

戦闘には参加していない、大型の飛行機に乗っていた仲間からの通信だ。伸ばした手を引っ込めて通信機のスイッチを入れる。

「こちらアラン！どういことだ！説明しろ！」

『言った通りだ、俺達以外の飛行機がいる！ロックに接近してるぞ！』

「何とかロックから遠ざけてくれ！」

『無茶言うな！通信が繋がらないんじやどうしようもない』

「だったらそいつの横につける！操縦士に直接」

アランが口を閉じるのを待たず、操縦席に射し込んでいた太陽光が一瞬だけ遮られた。

弾かれるようにアランは真上を見上げるが、日を陰らせた原因はすでにそこを通り過ぎ、アランの飛行を邪魔するように前へ降りてきた。

見慣れた飛行機の後ろ姿に、アランは思わずその名をつぶやく。

「レピータ……？」

見慣れていて当然である。アランも、ステイプも、鳥と戦っている五人の仲間も、皆同じ機体に乗っているのだ。

前に割り込んできた小型飛行機　レピータはずれるように左に曲がり、速度を落としてアランの横に並ぶ。

翼に翼をかすらせるような際どい飛行だったが、それを行った操縦士はアランのほうを見てもいない。

「凄い」



アランは感心を声に出した。同じことができないわけではないが、ここまで危なげなく滑らかに進む自信もない。

飛行技術は自分と伍するか、あるいはそれ以上。アランは隣の操縦士の実力をそう読んだ。

機体には橙色の塗装が施され、翼の先端だけが白い。華やかな印象がないのは、全体がくすんで黒ずんでいるためだろう。

元は果実を思わせる鮮やかなオレンジに塗られていたに違いない。年季と風格が感じられる飛行機だ。

右の主翼に可愛らしくデフォルメされて描かれているのは、彫りの深い顔立ちをした男の絵。

塗装とは別に翼に絵を描くのは、古参の操縦士が好んで愛機に施す装飾だった。

ふと気付くと、操縦士はようやくこちらを見ていた。

ゴーグルが光を反射して表情が読み取れない。右手で操縦桿を握り、左手でしきりに通信機を指し示している。

同じ機体だから、通信機も同じところにある。向こう側の意思を汲み取り、アランは左手の指を何度か繰り返して立てた。

指で教えたのは通信機の周波数だ。橙の操縦士が左の手元をいじるような仕草を見せ、

アランのイヤホンにやや大きめのノイズが混じり、すぐに収まる。

『……その紅白まんじゅう。聞こえるか』

紅白まんじゅうというのはアラン機の塗装を見て言ったのだろうか、聞こえてきたのは若い男の声だった。

飛行士学校を卒業して間もない自分よりは年上だろうし、そもそも雑音混じりの通信機越しでは判断しにくいものの、

それでも彼の操るレピータの使い込み具合に、この少し高い声は似つかわしくないように思える。

口調は乱暴で、どこか皮肉っぽくもあった。アランはどうにか舌打ちをこらえて返答する。

「良好。見ればわかるだろうが、今我々はロックと交戦中だ。すぐに離れる。危険だぞ」

『うるせえ、ヘタクソ』

忠告に返ってきたのは、火を見るより明らかな侮蔑だった。

「……今のは、俺の操縦について言ったのか？」

『おめでたいのは塗装だけかと思ったが、頭もか？ 決まってるだろ』

長い沈黙の後、ようやく搾り出されたアランの発言を、しかし操縦士は鼻で笑う。神経を逆撫するような『あー、やだやだ』に続けて『ただ真正面から突っ込んでくる奴に当てられないようじゃ、お世辞にも上手だとは言えないねえ。』

ましてや照準の調整に気を取られて敵の接近も忘れるなんざ……マジで笑わせてもらったわ。腹痛え』

傍聴していた大型飛行機の操縦士が啞然とするほどの皮肉を早口に並べ立て、

「こっ……こいつ！ 今すぐ訂正しろ！」

『何を訂正する必要があるんだよ。ロックが体当たりしてきたら、鼻水垂らしたガキだって逃げ出すぜ？』

ガキにできることもできないようなボケナスが、偉そうに口答えすんじゃない』

アランの堪忍袋の尾を一刀のもと両断した。怒りに我を忘れ、アランは左ペダルを思いっきり蹴り込む。

赤と白のレピータが操縦されるままに体当たりを仕掛けたが、その標的は急に右へ傾いたかと思えばアランの頭上に上昇、ひっくり返ったまま右隣に下降して元の高度に落ち付いた。

まるで面子が裏返るようである。何事もなかったかのように体当たりをかわした橙のレピータを呆然と見つめるアラン。

虚仮にされた怒り、そして自分には真似できないような高度な技術を見せつけた操縦士への劣等感に、ますます頬を赤くする。

『体当たりとは驚いたよ。ずいぶんと高度なテクニクを教わったんだ。お前、師匠の名前は？』

オレンジ色の飛行機がくると反転し、再び操縦席が上を向いた。ひやはは、という操縦士の高笑いに、アランは何も言い返せない。国立バレル飛行士学校を主席で卒業という肩書きを持つ彼だったが、そのことをここで言っただけなら

操縦士はますます図に乗るだろう。自分だけでなく、同じ学校を卒業した仲間のことまで馬鹿にしかねないことは容易に想像できた。アランは話をどうにか変えようという意図のもと、胸のむかつきを吐き出すように息を漏らす。

「……要求は何だ？ 俺を馬鹿にするために飛んできたのか？」

『マヌケ。俺はレピータで飛んでる。すぐそこにロックがいる。することは一つだろが』

内容こそ相変わらずの悪口だったが、操縦士の声色は明らかに変わっていた。

作品に集中する職人のような、あるいは弓に矢をつがえた狩人のような緊張感。アランの首筋が粟立ち、彼自身がそれに気付かない。

『紅白まんじゅう。お前、積んでるのは通常弾だけか。薬品弾は』

「あ……いや、薬品弾はないが、焼夷弾なら」

『準備してこのまま飛んでろ。鳥さんの落とし方を教えてやる』

言うが早いか、橙のレピータはいきなり前に踊り出た。

「あつ……！」

アランが止める間もなく必要最小限の傾きで旋回、橙のレピータは標的めがけて滑空する。

鳥よりも低い位置から接近して、まるで速度を落とさずに上昇。逃げる飛行機と追う鳥の間をすり抜けた。

『な、おい、誰だありゃ！』

見慣れない色の同型機に気付いた仲間の通信が聞こえたが、その質問に答えられる唯一の男は何も言わない。

鳥は追っていた緑のレピータより、派手な橙のそれを気にしたようだった。唐突に頭と翼の向きを変え、オレンジの機影を追尾する。果たして、その機体は鳥の真上にいた。

その光景を目撃した操縦士の全員が　恐らくは鳥すらも　驚愕する。

背面飛行で鳥とすれ違い、間髪いれずに急降下した橙のレピータはあらかじめ引かれていたレールの上を滑ったかのように鳥の背後を取り、何の前触れもなく機銃を放った。

主翼から伸びた火線が鳥に吸い込まれ、抉れた肉片と羽毛が千切った雑草のように空を舞う。

たまらず鳥は翼を伸ばして急旋回したが、それで避けた弾丸は数発だった。

鳥が右に回ろうが左に回ろうが、橙のレピータはすぐさまそちらに回頭して追ってくる。両者が見えない糸で繋がれているかのようだ。無数に穿たれた穴から溢れる鮮血を引きずり、鳥は悲痛な声を上げた。

『おい、紅白まんじゅう』

イヤホンにふいを突かれ、我に戻るアラン。橙のレピータの戦いぶりにすっかり見惚れてしまっていた。

それを気取られるのを恥ずかしかってか、対応がぶつきらばうになる。

「……その紅白まんじゅうというのはいい加減やめろ。アランだ」

『そうか。じゃあ紅白まんじゅう、お前、こいつを仕留めてみる』

「はあっ？」

反論を頭から無視されて眉をひそめたアランは、次の瞬間には身もふたもなく声を裏返らせていた。

『俺がやってもいいんだがな。こんなところで戦うとは思ってなかったから、弾数が怪しい。』

自分達がケンカを売ったロックだろ、とどめくらいは自分で刺し

な  
」

「それは……無理だ。狙うまではできるが、撃つとどうしても照準がずれる。整備不良らしい」

「馬鹿か。そりやお前の腕が悪いんだよ。機体のせいにしてんじゃねえ」

蔑むような操縦士の言葉に、アランは反論しようと思わなかった。実力差に謙虚になったのではない。

橙のレピータに追い回されていた鳥が、何を思っただか再び自分めがけて突進してきたのだ。

「お前が誰に飛び方を教わったのかは知らないけどな、機銃の撃ち方くらいは教わったろ。」

引き金を引く時に力を入れると、操縦桿が動いて狙いが狂うんだ  
「そんなのは知ってる！ さんさん練習した！」

「口答えすんじゃないやねえってさっき言っただろ。いいか、意識して力を抜け。わかったな」

何か言い返そうと思ったが、接近する鳥の迫力に負けた。

泣きそうになりながらもアランは照準機に鳥を補足し、焼夷弾の発射レバーに指をかけ、

そのまま引きそうになって初めて操縦士に言われたことを思い出す。

「くそっ！ 意識して、力を……」

リラックスするための努力というのは歯痒かった。

巨大な鳥が目前に迫っているという恐怖を必死に拭い去り、アランは少しずつ腕の力を抜いていく。

全身の筋肉が強張ってしまっていた。右腕だけが、不安になるほど脱力していた。鳥が射程距離に入った。小さく神に祈り、レバーを引いた。

細かな振動が伝わり、撃ち出した弾は一瞬で鳥の体に沈み、そして、  
「やればできるじゃねえか、紅白まんじゅう」

断末魔の悲鳴を上げた鳥の体を、舐めるように炎が包んだ。

鳥の背後に張り付いていた橙のレピータが、上昇して流れ弾を避ける。

『やったぞ！やったぞ！仕留めた！落っこちてく！』

『アラン、聞こえるか？間違はなく死んでる！俺達の勝ちだ！』

ひどいノイズとともに、仲間達の歓声が耳朵を打った。数度の深呼吸の後、首を捻って下を確認してみる。

炎と黒煙をまとい落ちていく鳥が、今まさに緑の草原に叩き付けられる瞬間をアランは見た。

「勝った……」

無意識に口をついた言葉を、アランはかぶりを振って否定する。勝ったのは自分ではない。

アランは狭い操縦席の中でどうにか体をほぐしながら、機体を緩く旋回させて橙のレピータを探す。

くすんだオレンジの飛行機は、北の空で豆粒のように小さくなっていた。

「あーっ！お、おい、ちょっと！待ってくれ！おい！」

慌てて叫ぶアランだったが、これだけ距離が開いては電波が届かない。通信機が役立たずになる。

「こちらアラン、あのレピータはどうしたんだ？」

『どうしたって、飛んでったよ、北に……。見えてるだろ？』

小さな点はすでに輪郭がかすみ、ギンラ大山脈のシルエットに溶け込んでしまっている。

機体と同じである以上、今から追いかけたところで絶対に間に合わないのは目に見えていた。

『まあ、北に行ったなら、ウルディラに向かう気だろう。探せば見つかるはずさ。』

俺達も戻って後始末を済ませよう。ステープのこともあるしな

「……あ、ああ」

アランは呆けたように遠ざかる機体を見送っていたが、もはや生存は絶望的な友人の名前に瞳を伏せ、編隊を組み始めた仲

間達に続いた。

もう一度、鳥の亡骸を見下ろす。

鳥を焼く炎はだいぶその勢いを弱めていた。周囲の草は黒く焦げていたが、青草に燃え広がることはないだろう。

名をロック鳥。世界最大の鳥類にして、生態系の頂点に君臨する最強の生物。

過去には気まぐれで村を一つ潰したという、人類の天敵でもある。

大きな街の周辺には迎撃の準備が整えられ、飛行機が機銃を積んで飛び回るようになってからも、

その脅威が完全に消え去ったとは言えない。

高地に生息するロック鳥が真つ先に狙うような山岳地帯の小村に、対ロック鳥用の高価かつ巨大な兵器を導入することは難しいからだ。だからこそ、ロック鳥退治を専門とする操縦士が重宝がられる。

ある者は高額な報酬のために、ある者は人々の安息のために、ある者は同じ戦場を飛ぶ仲間のために、

操縦士達は派手に飾った愛機を駆り、命を賭けてロック鳥と戦ってきたのだ。

ほんの数年前までは。

## 2、ユーリとステフ

バレル王国ウルディラは、ギンラ大山脈を間近に見上げる高原に位置する。

街といっても小規模なもので、実際には大きな村と説明したほうが賛同を得られるだろう。

周囲を囲む平坦な草原を牧草地として利用、古くから牧畜が盛んであるが、

山脈越えの出発点にするには他の街のほうが便利だったこともあり、それ以上の発展には恵まれなかった。

都会の大渋滞に慣れてしまった者なら、この道路を走る自動車の少なさを見て、

「通行止めの道路に迷い込んでしまったのか」と不安になるに違いない。しかし、これがこの街の普通の姿だ。

道路も石畳やアスファルトではなく、単に草原を焼き払い、土を踏み固めて作ったもの。

そこに面しているのも、山から切り出してきた石を積んだだけの簡素な建物が大半だった。

「何とも、のどかな街ですなあ」

買い物客で賑わう商店街を見渡し、小柄な男が豪快に笑う。

短く刈り込んだ髪はすっかり白と黒のまだら模様になってしまっていたが、

身長割にがっちりとした体と日焼けした肌は、老人と呼ぶにはまだ早いようにも思える。

油に黒く汚れたオリブイエローのつなぎに、太鼓腹が窮屈そうに収まっていた。

「気に入りました。私も退職したら、こんな土地で余生を過ごしたいものですよ。いや、良い街です」



「そうは思っていない者もいるようだかな」

白い歯を覗かせた小柄な男にそう言ったのは、隣を歩いていた長身の男だった。

痩せた体で着こなしている軍服は小柄な男のつなぎと同じオリーブイエローで、その色もデザインもバレル王国軍の軍服とは違っている。

「そいつは何のこと？大佐」

「見ろ」

大佐と呼ばれた長身が視線で左方を示す。

白い建物の壁に寄りかかり、空の酒瓶を足元に転がして、赤毛の青年がうなだれていた。

二人の男の視線にもまるで気付かず、死体のようにぴくりとも動かない。眠っているようだった。

「浮浪者ですかね？ まあ、この時期なら外でも眠れるでしょうが」

「飛行機乗りらしいな」

羽織っているのは赤茶色のフライトジャケット。薄汚れたズボンの尻に敷いているのは耳当て付きの飛行帽。

手にはゴーグルまで握っている。絵に描いたような飛行士の服装だ。小柄な男は納得したように頷いた。

「そのようすな。飲んだ帰りに眠ってしまったのか、もともと帰る家がないのか……」

近頃はギンラ大山脈のふもとですら、飛行機乗りの仕事は減っていると聞きますが 彼もその被害者ですかね？」

「復唱しろ、マイケルズ中尉」

「はい？」

小柄な男 ジャッキー・マイケルズ中尉が青年から顔を上げるとそこには薄い唇をぶるぶると震わせる長身の男がいた。

やれやれ、またか。呆れの表情をどうにか隠したマイケルズ。男は神経質そうな細面を苛立ちに歪めている。

「航空郵便業、旅客機の操縦士、サーカスでのアクロバット飛行  
飛行士の仕事は多い。飛行機乗りはそういった仕事をしていれば  
良い。」

そういった仕事だけをしていれば良いのだ」

「はい」

「わかるか中尉。ロック鳥討伐を飛行機の上に任せるような時代は  
終わった。」

そんなこともわからず、理解できず、新たな仕事を探すこともせ  
ず、ただ過ぎ去った過去にすがり続ける愚か者

同情する余地もない。そんな者達が、どうして被害者と言える？  
「まったく、その通りであります」

どことなく棒読みに聞こえるマイケルズの同意に、それでも男は満  
足したようだ。

ヒステリックな雰囲気、見た者が鳥肌を立てるような笑みを浮か  
べていた。

マイケルズが心中で舌打ちする横を、買い物途中らしい太めの中  
年女性が通り過ぎ、

「……何だよ、お前ら」

その足音を聞き付けてか、青年が力なく顔を上げた。

青年は自分を見下ろしている二人の男に冷ややかな視線を投げかけ  
る。長身の男が応じた。

「大したことではない。屋根のある家で眠れないような貧乏人が珍  
しかったただけだ」

悪意を隠そうともしない上官の言葉にマイケルズが身を強張らせ、  
「なるほど、家のない飛行士を見るのは初めてですか。」

さすがはイミナ陸軍の大佐様、世間知らずでいらつしやる」

軍服をちらりと見ただけで国はおるか、所属する軍と階級まで言い  
当ててしまった青年に、長身の男も身を強張らせた。

青年は皮肉っぽく口元を吊り上げて笑う。

「そんなイミナの大佐様が、こんな田舎に何の用で？」

「貴様に話すことではない」

「ああ、これは気が利きませんで」

身長差のある二人を交互に見比べて、納得したように頷く青年。

「青空の下、軍服でよがり合うようなのがお好みでしたか。」

どおりで、海も遠いのに生臭いと思いましたよ」

臆面もない発言。マイケルズが絶句し、長身の男が肩を震わせながら上着の内側に手を突っ込む。

背後を走り抜けたトラックの音がやけに大きく感じられた。

「貴様……言わせておけば　な？」

軍服の中で拳銃を握り締めた男は、青年がぼかんと横を向いていることに気がついた。

「おい、貴様　」

男の問いには答えず立ち上がり、己が見ていた方向へ駆けていつてしまふ青年。

思わず手を止めてしまっていた男が我に返った頃には、その姿は二つ先の曲がり角の奥に消えていた。

「……ちっ」

長身の男は舌打ちし、胸の中の銃を取り出さずに手放した。不快感を隠そうともせず、足元の砂を蹴り荒らす。

「何だっただんでしょうかね、あの飛行士。なかなか威勢のいい男でしたが」

「もついい……奴の話は金輪際するな。行くぞ」

「……はいはい、了解ですよ」

早足で歩き出す長身の男。

その背中に『くたばれ』のサインを突き付け、マイケルズが続く。

車同士がすれ違えるかどうかという狭い道を縫うように走り、青い小さな三輪トラックは、何の変哲もない民家の前で停まった。

何も詰まれない荷台に、華麗なステップを刻むダンスシューズのイラストが描かれている。

やがて排気管が煙を吐くのを止め、エンジンが停止し、運転席の扉が開き、

栗色の髪的女性が跳ねるように降りてきた。

よほどトラックの運転が退屈だったのだろうか、女性は自分の足で地面に立つや、大きく体を反らして伸びをする。

やや高めの位置でまとめたポニーテールが揺れ、さしたる起伏もない胸が作業服を押し上げた。

化粧つきの肌が、味気のないライトグレイの作業服が、香水の代わりに漂わせる機械油の匂いが、

自己の外面に興味がなさそうな出で立ちが、彼女を二十三歳という実年齢より幼く見せている。

女性は助手席に置いていた型遅れのラジオを小脇に抱えると、作業服の襟元をぞんざいに直していた手で民家の玄関をノックした。少しして、腰の曲がった白髭の男が顔を出す。

「どちらさんだい…… おお、ステファニー。どうしたのかね」

「決まってるじゃないですか。ラジオの修理が終わりましたよ、ほら」

ポニーテールの女性ステファニーが人懐っこい笑顔を浮かべ、老人の前にラジオを掲げてみせる。

老人は一瞬驚いたように目を見張り、すぐに頬を緩ませた。

「おお、早いな。もう直ったのかね」

「ばっちりですよ。ちなみに外側の掃除はサービスです」

「まるで新品のようだな。大したものだね」

自ら光を放っているかのように輝く 修理を依頼した時には傷だらけになっていたはずだった メッキパーツを撫で、老人が目を細める。

懐かしいものを見る目だった。彼はラジオを見ていたのか、それとも別の何かを見ていたのか。彼以外の者には知る由もない。

老人はこのラジオが死んだ妻の形見であることを告げ、ステファニーは何も言わずに微笑む。

「何しろ古いものだから。どこの工場に頼んでも、部品が足りないの一点ばりだな。」

半ばあきらめておったんだよ。……モーゼスの言う通りだ、若いのにいい腕をしておる」

「ありがとうございます。そうですか、モーゼスさんの紹介でしたか」

「ああ。上機嫌だったよ、壊れたレコードを三日で直してもらったー、と」

「ま、私の腕なら当然ですよ」

ない胸を張るステファニー。半ば本気で自慢しているようだったが、それが嫌味に聞こえないのは彼女の魅力と言えるだろう。

老人は思わず苦笑いを浮かべた。話しながら取り出していた財布を開き、中から修理代を抜き取る。

「ほれ、お代はこれでいいのかな」

「はいはい、毎度」

ステファニーがポケットにねじ込んだ数枚の札は、この街での機械の修理費としては割安だった。

そのことを問えば、一人暮らしなのでお金はあまり必要ないという。

「おかげで簡単な仕事が多く来ますからね。ちよつと壊れたけど、高い金払って修理に出すのはもったいないー、つてのが」

そう言つてステファニーは笑った。老人は納得したように頷き、それならと人差し指を立てる。

「お昼はまだだろう、ステファニー。中で食べていくといい」

「ありゃ、いいんですか？」

「もちろんだとも。パスタを作ったんだが、一人で食べるには多す

ぎると思っていたところだよ」

「あ、それじゃあ遠慮なくご馳走にな」

「ステファか？」

ぱちんと手の平を合わせて笑顔を見せていたステファニーが、靴底も焼けよとばかりに回れ右した。

地面を蹴り飛ばしてスタートを切り、老人のことなど忘れてしまつたかのような勢いで道路を横断、

三輪トラックの陰から顔を出した車に追突されかけ、怒鳴る運転手にぺこぺこ頭を下げている。

呆然とする老人。走り去つた乗用車を見送るステファニーの横に、赤茶のフライトジャケットを羽織つた青年が並んだ。

「……ああ、やっぱりステファか」

「ユーリ！」

鼓膜に痒みを覚えるほどの奇声。ステファニーは満面の笑顔で赤毛の青年に飛び付くと、迷いなくその唇にむしゃぶりついた。

開いた口の塞がらない老人の前で、彼女の細い体があっさりと突き飛ばされる。

ふらふらと踊るように　むしろ踊りながら戻ってきたステファニーは、玄関前でびしつとポーズを決めると

「すいません、用事ができてしまいました！お昼ご飯、ご一緒できなくてすみません！残念です！」

これ以上ないほど嬉しそうに言った。

「あ　ああ、そうか。それじゃあ、また今度。いつでも来るといいよ」

「ありがとうございます！今後ともステファニー・ランデルマンをご贔屓に！」

ステファニーは右手の指を真つ直ぐ伸ばして敬礼した。

風を切る音が聞こえるほど機敏で、しかも美しい。

見れば当然のようにトラックの助手席に乗り込んでいた青年もしきりに左手で口元をこすりながら　完璧な角度で右手を額に当

てていた。

「それでは！失礼します！」

運転席に飛び込むステファニー。トラックは近所の住民が例外なく振り向くような爆音を奏で、土煙を巻き上げ走り去る。

玄関前にはタイヤが砂を掻き分けた痕と、立ち尽くす老人が残された。

「半年……いや、この街に来る前だから一年ぶりくらいになるのかしら？」

本当に驚いたわ。何、いつ来たの？」

「一昨日」

「二日も野宿してたの？」

「あれ、言っただけか。宿取ってないの」

「ううん。でもちょっと汗臭かったから。少なくともシャワーは浴びてないなと」

「そんなに臭うか？」

「今は平気よ。キスする前に思ったの」

「……そう思ったなら離れるよ。舌まで入れやがって」

ユーリ・ソーンツェフは全開にした窓から腕を投げ出し、後方に流れていく街並みを眺めている。

ふてくされたような表情をしていたが、隣で流行り歌を口ずさむ運転手にそれを気にする様子はなかった。

彼が本当に不機嫌なわけではないことを知っているからだ。

人相が悪いと言っただろうか、意外に整った彼の顔は、その実どうしても他人に良い印象を与えない。

もともと表情に乏しい男でもある。陰気な髪型も手伝ってか、ユーリは常に機嫌の悪い男だと誤解されがちだった。

そのことをステファニーは良く承知している。

「で、厄介になって大丈夫か？ お前も金がないんだったら、別に構わなくても」

「あー、大丈夫よ。実は機械の修理屋始めてね。少しは余裕があるから」

「そうか……じゃあ、悪い。世話になる」

ユーリは窓外に出していた腕を引っ込めて小さく頭を下げた。水臭いわよ、と笑うステファニー。

「あなたと私の仲じゃない。……でも、どうしてそんなに金欠なのよ。」

私をあてにしていたってわけじゃないんでしょ？」

「ああ。ロック鳥が多いらしいから、もしかしたらいるんじゃないかとは思ってたけどな。」

本当に会えるとは思わなかったよ」

「じゃあ、どうして？」

「レピータの燃料代。あと、他に弾薬代がかさんでな」

「弾薬？」

「実はここに来る途中、ロックと鉢合わせした」

「……何ですって？」

ステファニーの表情が硬直した。自分を凝視する運転手に前を見るよう忠告し、ユーリは続ける。

「言った通りだ。ここに飛んでくる途中、ロック鳥に出くわした。というか、俺が一方的に見つけた。」

無視しようかとも思ったんだが、先にそいつと戦ってた連中がとんでもないヘタクソ揃いでな」

「それで助けに入ったわけ？ よく無事だったわね」

「普通のロックだったら俺だって逃げ出したんだが、運のいいことにそのロックがまだ若かった。」

俺一人でもどうにか倒せたよ。で、止めと後始末はヘタクソに任せて、後はさっさと飛んできたわけだ」



「へええ……」

先ほどまでとは一転、ユーリは楽しそうに両腕を動かし、ロック鳥と自機の動きを説明する。

感心したように相づちを打っていたステファニーは、

「お前も一緒だったら良かったな。」

そしたら、あのヘタクソ連中に本物のロック鳥討伐つてのを見せてやれたのによ」

その一言に大きく目を見開き、次いで気まずそうにユーリから視線を外す。つぶやいた。

「……それは、どうかしらね」

「何がだよ。まさか腕が落ちたのか？ そんなはずないだろ、この辺りはロック鳥が多いって聞いたぞ。」

それに、エンペラーだって目撃されたって」

「ごめん」

訝しげに質問を投げかけてくるユーリを一言で制し、目を泳がせたままステファニーは言う。

「ウルディラに来てからは、数えるくらいしか飛んでないの。」

ロック鳥討伐は、前にあなたと一緒にだったのが最後よ」

「……何だつて？」

今度はユーリが固まる番だった。信じられないという思いをありありと顔に出し、運転席の側に身を乗り出す。

小さく息をつき、ステファニーは女は現実を見ちゃうもんなのよと前置きした。

「何か、世の中に疲れちゃってね」

そして舌を出して笑う。ずっと元気だった彼女が、その一時だけはひどく憔悴して見えた。

### 3、ロック鳥を追う者

木製のテーブルを指で引つかく。朽ち木のような天板は、軽い抵抗とともにぼろぼろとほぐれた。

アルコールの匂いが染み込んだ店内で、アランは黙って小振りなジヨッキを傾けていた。

短めに刈り込んだ黒髪が清潔な印象を与える少年だ。

子供らしさの抜け切らない顔付きといい、こういった酒場の似合う男だとはお世辞にも言えないだろう。それはアラン自身も認めている。

彼は筋金入りの下戸だった。右手に持ったジヨッキの中で、輪切りのレモンを浮かべたコーラが静かに泡を吹いていた。

酒場『大きなランタン』亭に閑古鳥が居座ってからしばらく経つ。もともとカウンター席を除けば腐りかけたテーブルが一つしかない小さな店とはいえ、

そろそろ夜も更けようという稼ぎ時にも、客の姿はアラン以外にない。

他の客が来ないからとアラン達がここを溜まり場にしていなければ、とつくに潰れているはずの店である。

酒の飲めないアランのためにコーラが用意されているというのがその証拠だ。

アランはちらりと壁掛け時計を見た。

待ち合わせの時間には数分の猶予があったが、それを待たずに店唯一の扉が軋む。

「よう、ちよつと遅れたか？」

「俺が早く来たんだ。時間通りだよ」

入ってきたのは浅黒い肌の大柄な男。アランの友人であり飛行士学

校の同期であるジェームズだ。

カウンターに立ち寄り、突っ伏して寝ている店主を起こさずにビール瓶を失敬してきた。

アランと同じ十代後半の若者ではあったが、彼のほうはアルコールに耐性があるらしい。

向かいに座った仲間を一瞥し、アランはコーラを喉に流し込んでから訪ねる。

「で、どうだった？」

「駄目だ」

机よりはまだ頑丈な椅子の背もたれで王冠を弾き飛ばし、瓶に口をつけるジェームズ。

「オレンジ色のレピータが来たって話はちらほら聞けたけど、その操縦士についてはさっぱりだった」

「飛行士の集まりそうな場所を探したのか？」

「まあ、知ってるところはな。だが、いかんせん手持ちの情報が少なすぎる。」

何せはつきりしてるのは乗ってる機体とその色だけ。後はせいぜい口が悪いつてことくらいだからな」

「そうか……。くそ、誰だ？簡単に探せば見つかるだなんて言った奴は」

「一応断っておくが、俺じゃないぞ」

「くそ」

悪態についてアランはジョッキからレモンを摘み上げた。

二つ折りにしてかじり付き、味の薄さに顔をしかめつつ飲み込んだ。残った皮はコースターの上に置く。

「……腹は立つけど、凄い技術だった。あの操縦士が仲間になってくれたら。あの技術を指導してくれたら」

頬杖をついたアランの言葉。ジェームズもため息とともに頷いた。

飛行機乗りにとって、技術とは己が命も同然の宝だ。

陸においては糧となり、空においては剣となり盾となる、飛行機乗りが飛行機乗りとして生きていくためには欠かせないもの。  
だからこそ、それを学ぶのは容易なことではない。

ロック鳥の討伐を専門とするなら尚更だ。アラン達のように飛行士学校に通わないのであれば、  
熟練した操縦士に師事、長い下積みをこなした上でようやく教わるか、あるいは独学しかない。

それだけ苦勞して習い覚えたものを軽々しく同業者に教える飛行士などいるはずもなく、

ましてやアラン達は努力や才能だけでは通過できない 先立つものが必要になる 狭き門、

国立の飛行士学校を卒業したエリートと称しても過言でない身の上である。

およそ飛行機が絡んでいればどんな職でも選び放題の、バレル王国において最も恵まれた飛行士。

そんな者達に技を伝授してくれる飛行機乗りなど、世界規模で探しても見つかるかどうかは怪しかった。

「……その常識をかなぐり捨ててまで、頭を下げる価値がある」

決定的に実戦経験に欠けるものの、単純に操縦技術だけを見るなら、アラン達の實力は決して低くない。

ベテランと呼ばれる操縦士に伍するだけの技量は備えており、それに伴って操縦士を見る目もある。

二十年弱の人生でも、アランは多くの飛行機乗りを見てきた。自分より格上の飛行機乗りとて何人も見てきた。しかし、

「あれだけの腕前の持ち主は見たことがない」

「そうだな。ロック鳥を一人で倒すなんて、冗談でも誰も言わないぞ。言えるもんかよ」

アランはうつむき、ジェームズは天井を見上げる。

自分達では足元にも及ばない高みにいる橙色の飛行機に、二人は何

を重ねていたのだろうか。

店名にするだけはある年代物のランタンが、気まぐれに中の炎を揺らしていた。

「……出ようぜ。また明日、同じ時間でいいか？」

「ああ」

残り少ないコーラを一息に流し込むと、アランはポケットで小銭を弄りながら席を立つ。

ジエームズはビールを飲み干してはいなかったが、瓶ごと持って帰るつもりの方だった。

真面目に仕事をするつもりがないらしい店主の寝顔の前に勘定を置き、立ち止まらずに出口に向かう。

すると、古臭い扉が控えめな音とともに開いた。

「失礼します」

この店に、自分達以外の客が入ってくることは滅多にない。

驚く二人の前に顔を覗かせたのは、彼ら以上に酒場が似つかわしくない少女だった。

平均を下回る小さな体をしている。年は十代の半ばか、それ以下。

さらさらとしたブロードを短く整え、吊り上がった目が凜とした雰囲気をかもし出しているが、

視線は落ち付きなく店内をさまよっている。

不安で仕方がないといった様子だ。酒場に入るのは初めてなのだろう。

「……おい」

アランが立ち止まっていると、隣のジエームズが彼を肘で小突いた。見れば少女と目を合わせてしまう。色の薄い瞳が、心細そうにアランを見ている。大柄なジエームズよりは話しやすいと思ったのかも知れない。

「くそっ ええと、入っても大丈夫ですよ」

恨みがましくジエームズを睨んでから、アランはなるべく刺激を与

えないと言った。

いくらか態度を和らげた少女がようやく店に足を踏み入れる。一度店内を見渡してから、不思議そうにつぶやいた。

「……お客様は、お二人だけですか？」

「ん、ああ。あまり繁盛してない店なんだ」

「そうなのですか？　ここに飛行機乗りが集まっているという噂を聞いて来たのですが」

ジエームズの言葉に小首を傾げた少女は、アランの自分達が飛行機乗りであるという名乗りに慌てて頭を下げた。

若い二人の飛行士が苦笑する。見た目で飛行士扱いしてもらえないことには慣れていた。

「大変失礼しました、レベッカ・ラモニカです。

唐突ですが、少々お伺いしたいことがあります。

お時間は取らせませんので、ご協力をお願いできませんか？」

「まあ、俺達に答えられる範囲なら……なあ」

アランの目配せにジエームズも頷く。やや緊張した面持ちで椅子を勧めると、レベッカと名乗った少女は丁重にそれを断った。

「本当に少しです。　それでは早速ですが、

このお店にはロック鳥討伐を専門とする飛行機乗りが集まっていると聞いてきました。

お二人もそうなのですか？」

「ああ、一応」

「お二人は、ここを拠点に活動されているのですか？　ウルディラに最近来たばかりと言うことは」

「とりあえず、ウルディラに来てから一年くらいになりますが」

「そうですか。それでは、この近辺で最も強いロック鳥の所在を教えてください」

二人が固まった。どこからか取り出した手帳にしきりにメモを取っていたレベッカが二人の様子に気付き、

わずかに動揺の兆しを見せる。そろりそろりと手帳の陰に自分の顔を隠した。

「……あ、あの。私、何か失礼を」

「あ……いや、大丈夫ですよ」

「確かに大丈夫だけど……この辺で一番強いロック鳥の居場所を教えて欲しい、ってことか？」

「はい」

力強く頷くレベツカ。アランとジェームズは互いに顔を見合わせ、困ったように顔を引きつらせる。

ロック鳥の強さに格付けをするほどの経験など、アラン達にはない。「どうしました？」

「いや、何でもなし。すまないが、俺達にはちよつとわからないな」ジェームズが愛想笑いを浮かべ、レベツカは特にそれを問い質さなかった。

何ごとか革張りの手帳に書きつけた後、指先でペンをくるくる回しながら上目遣いに聞いてくる。

「それでは、それがわかりそうな飛行機乗りの方に心当たりはありませんか？」

少し考え込む仕草をしたジェームズがウルディラでは有名な飛行機乗りの名前を挙げ、

アランが彼はアクロバット飛行のベテランだからと却下する。

ならばとジェームズは近所に住んでいる老年の操縦士を提案するものの、

少し前に亡くなったとアランに聞かされ、思わず唖った。

「そうか、死んじゃったのか。いい人だったのにな。」

で、お前も少しは考えろよ、アラン」

「考えるも何も、あの人でいいんじゃないのか？ ほら、あの街外れの」

きょとんと黙り込んだジェームズは、次の瞬間には納得したように手を打ち合わせた。その横でアランが続ける。

「街外れに、間違いなく凄腕の女性がいます。

本業は機械の修理屋ですが、実力は本物です。ロック鳥の力量もあるいはわかるんじゃないかな」

「修理屋……？ その方の名前は？」

「確か、ステファニー・ランデルマンだったと」

朝起きると、そこにステファニーの姿はなかった。

「……ステフ？」

一人暮らしの女性の家にベッドが二つあるわけもなく、ユーリは床に敷かれた毛布の中で家主の名を呼ぶが、返事はない。

右隣のベッドの上では敷布団がかまくらのように盛り上がっていた。人が寝ていた時の形をそのまま保っているのだろう。

「今、何時」

薄桃色の枕のそばにステファニーの懐中時計を見つけ、ユーリは何気なく手を伸ばし、

ふいに鼻をくすぐった甘い香りにびくりと身を縮こまらせた。誰もいない部屋できよろきよろと人の姿を探し、息を吐く。

そこはとにかく雑然としていた。生活に必要なありとあらゆるものを、リビングに集中させたかのような印象がある。

部屋の片隅に置かれたシングルベッドの真向かいには洗面所兼用のキッチンが据えられ、

その隣にはあるうことか洗濯機が居座っている。

脱水用のローラー部分に引っかけられた少女趣味の下着がユーリを赤面させた。たまらず横の窓に目を逸らすと、東の空に太陽が見えた。

「ステフ……隣か？」

ユーリはところどころ擦り切れたスニーカーを突っかけて立ち上が



った。

昨晚のささやかな酒宴に使われたカップが片付けられていないテールの脇を通り過ぎ、日めくりカレンダーの貼り付けられた玄関の前へ。

途中、洋服掛け　壁から壁に渡された荒縄から、自分のフライトジャケットを取って羽織るのも忘れない。

着ていたポロシャツとゆったりした布ズボンは、ステファニーが半ば強引に買い与えてくれたものだった。ドアノブを捻る。

「　んあ。おはよう、ユーリ」

食材でいっぱいにした買い物かごを携えたステファニーが、今まさに扉を開けようとした姿勢のままで言った。

「朝飯食いながら仕事か。忙しいんだな」

「いつもはこうじゃないわよ」

ユーリとステファニーの手には、熱いソーセージを割ったパンに挟んでケチャップをかけた簡素な朝食がある。

鍵束をじゃらじゃら鳴らして二人が向かったのは、自宅のすぐ隣に建つ彼女の工場だ。

板に乗せたカマボコのような形をした建物の巨大さを見れば、

風呂はもちろんトイレすらない彼女の家の狭さにも納得できよう。

決して裕福ではないステファニーがこれだけの施設を用意しようと思えば、何かを犠牲にする必要があるのは明白だ。

もつとも工場の脇には仮設トイレがあつたし、中に入ればシャワールームも存在することをユーリは知っている。

先日この家に来たユーリが真つ先にしたことは、三日近く溜め込んだ垢を落とすことだった。

「養う家族もないし、趣味と仕事が直結してるようなもんだし。

そんなに真面目に働かなくても、充分楽しく生活できるのよね。本当に怠けてるわけじゃないけど。」

いつもなら朝市でご飯を食べ終わって、街をうろろしてる時間

かな」

「じゃあ、何で開けるんだよ」

「昨日の話の続きをしようと思って。酒の席で話すようなことじゃなかったから」

ステファニーの寂しげな笑顔。鍵を差したままの扉を押し開け、親指で中を指し示す。

「どうせ暇でしょ？ 付き合ってよ」

「ああ」

頷いたユーリがステファニーに続いて扉をくぐった。

外観の大きさに相応しく、中も広い。

コンクリートの引かれた床にはレンチやドライバー等の工具、細かな部品の類は転がっているものの、

旋盤やプレス機のような、工場に付き物の工作機械がほとんど置かれていない。

壁一枚をまるまる占拠する大型シャッターといい、どこかの軍隊の格納庫に連れて来られたような感覚がある。

実際、そこには一機の飛行機 レピータが安置されていた。

夕焼け空を連想させるユーリ機とは異なり、晴天に溶け込むような青に塗られた対ロツク鳥用軽戦闘機は

しかし翼端は白く塗って主翼にイラストを描く装飾といい、使い込まれた印象といい、色以外はユーリのレピータと酷似している。

トラックの荷台にも描かれていたステップを踏むダンスシューズは、彼女の名前 "Step" hanie を絵に表した彼女の紋章だ。

空における自らの活躍を誇示するために、飛行機乗りは自らの機体を派手に着飾る。

「見た感じ、調子良さそうだな」

「私が毎日いじってる飛行機よ？ 今すぐにだって大陸横断飛行ができるわ」

飛行機を見るや珍しく表情を明るくしたユーリの言葉に、ステファニーが偉そうに腕を組んで胸を張った。

「あの名操縦士トラヴィス・シルバーをして『神』と言わしめた私の整備、

甘く見てもらっちゃ困るってもんよ」

「まあ、言うだろうな。隊長はお前に甘かった」

「あなたにもね」

「違いねえ。……しかし、いつでも飛べるように整備してる割には、最近では飛んでないみたいだが」

ユーリが飛行機に歩み寄りながら言った。むらなくペンキの塗られた機体を撫で、プロペラの向いている方向を軽く睨む。

ステファニーは自嘲気味に唇を吊り上げた。彼の視線の先　飛行機大の物体が唯一出入りできるシャッターの前には、

とても数分で片付けられる量ではない荷物が山と積まれていた。

「会った時、トラックで言ってたことは本当なのか」

「ええ、話つてのはそのこと。あなたに謝っておきたくてね」

ステファニーの顔と、客が来た時にでも使うのか工場の一角に置いてあるソファを交互に見比べ、

結局ユーリはその場に腰を下ろした。ステファニーも寄り添うようにしてそれに習う。

鉄骨を組んだ高い天井の下、飛行機の足元に二人が座り込んでいる。

「……あなたと別れてから、私もあっちこっち飛んだのよ。」

でも運が悪かったみたいだね、行く先々でお払い箱。他の皆と一緒に、放浪生活を送るはめになったわ」

「クローズラインか？」

「それもあるけど、一番は私達の悪評が思ったより早く近隣に伝わっちゃったのよ。」

燃料と整備のことと考えて、近場から仕事を探したのがまずかったみたい。　悪事千里を走る、ってね」

ステファニーは肩をすくめて嘆息した。

ロック鳥討伐専門の飛行機乗りが自らの機体を華美に塗装し、むやみに目立ちたがるうとするのは

自己顕示欲を満たすためでもあるが、多くの場合は次の仕事を得るためである。

一目で誰のものかわかる機体でロック鳥を倒せば、その機体を駆る操縦士の評判は各地に伝わる。あちこちに名が広まる。

有名になれば次の仕事も得やすくなるし、その報酬も上がる。

ただし、この方法には一つの弊害が付きまとう。評判と同じように

否、それ以上に悪評も伝わりやすくなってしまふのだ。

「……あの失敗のツケは、思ったより大きかったわけか」

「そういうこと。もともと私達は『大陸一の飛行機乗り』って有名だったからね。」

そんなチームが、ロック鳥一匹に全滅されたとあつちや

「あいつは普通のロック鳥じゃねえ！」

埃っぽい床を叩いてユーリが身を乗り出すが、そんな彼を見るステファニーの目は冷め切っていた。

恐らく彼の脳裏には、自分達に引導を渡したロック鳥の姿が浮かんでいるのだろう。

言われるまでもなく、あれは普通のロック鳥ではない。ロック鳥なのかどうかさえ怪しく思えるほどの怪物だ。だが、

「そんなこと、お客さんには関係ないでしょ」

ステファニーは諦観の表情で、しかし決然と言い放った。

「私達にお金を出してくれる人は、私達がロック鳥を倒してくれることを期待してるの。」

相手がどんなロック鳥だろうと、ロック鳥である以上は倒さなきゃならない。

それが出来なければ、何を言われても仕方ないわ」

「二十機集まっても、たった一羽のロック鳥すら倒せない役立たず

「ってことか？」

「言わなきゃ駄目？」

諭すようなステファニーの視線を受け、ユーリは長く息を吐いた後、一言謝罪した。

「悪かった。……で、その後はどうなった？」

「辞めてったわ。ある人はチームを辞め、ある人はロック鳥討伐を辞め、ある人は飛行機乗りも辞めちゃった。

自分を見失ってチームを離れた人もいる。あなたみたいにね」

「そうだな、真っ先にチームを辞めたのは俺か……」

「気にしないで。あなたがいてもいなくても、チームの崩壊は避けられなかったと思う。

私だって最後まで残ってたわけじゃないし」

沈痛な顔でうつむいていたユーリは、その言葉に小さく顔を上げた。

「……じゃあ今、チームはどうなってるのかは」

ステファニーは首を横に振り、そして自分が抜けた時点で残りは三人程度になったことを付け加えた。

「チームを辞め、ウルディラに放り出された私に残ったのは、いくらかのお金と一機のレピータ……って、ありがちな展開よ。

最初は飛行機で稼ごうかと思っただけで、いつぞや泊まったホテルの冷蔵庫を直したのがきっかけで

機械修理の仕事をするようになったの」

「そう言えば、機械に強かったな。飛行機以外にもいろいろ直してたっけ」

「うん。それでお金を貯めて、作ったコネを利用してここを安く買ったわけ。

街から遠いし、元は古くてボロボロだったから捨値同然だったわ」  
「なるほど」

ユーリは立ち上がった。ゆっくり首を回して肩の凝りをほぐし、ステファニーのレピータを見やってつぶやいた。

「それで上手くいったから、今は飛行機に乗らなくなってしまったと。そういうわけか」

「……ごめんね」

ステファニーが気まずそうに指先を擦り合わせた。自分がユーリより先に

飛行機に乗ることをやめてしまったことが後ろめたいのだろう。彼女にしてみれば、戦友を見捨てて戦場を去ったようなものだ。

「お前が謝ることはねえよ」

しかし、ユーリにステファニーを責めたりする様子は見られなかった。

ただ先ほどしていたようにレピータの青い装甲に手を触れ、愛おしげに撫でるだけだった。

「多分、お前のほうが正しい」

「ユーリ……」

ばんつ。何か言おうとしたステファニーを遮るように、ユーリは手の平で飛行機を軽く叩く。

「やめようぜ。言いたいことはわかった、これ以上話しても気が滅入るだけだ」

力ない苦笑いを浮かべたユーリに、ステファニーもまた疲れ切った微笑みを返した。

簡素なカップが二つ、盆の上に乗っている。中身の紅茶がこぼれないよう注意しつつ、レベッカはゆっくり深呼吸した。

薄汚れたオリーブイエローの出で立ちは、イミナ陸軍指定の作業用つなぎ。軍人以外が着るはずもない衣服だ。

イミナ共和国軍兵器開発部所属の一等兵。それが軍におけるレベッカの肩書きだった。

表情を引き締めた彼女の前には、つなぎと同じ色の布を張ったテン

トがある。

サーカス団が会場として使うものに良く似ていたが、あそこまで大きくはない。物置が二つ収まるくらいはあるだろうか。

周囲には同じようなテントがいくつか設置されている。この近辺は、レベツカの所属する部隊がバレル王国に滞在する間の拠点だった。

「失礼します」

レベツカは入口の布を退け、緊張した足取りで中に進んだ。

テント内の様子はあっさりしたものだだった。中にあっただのは折り畳み式のベッドと飾り気のない角テーブル。

主の趣味か、その天板に置かれた戦車の置物を挟んで二人の男が向かい合っている。

「お茶をお持ちしました」

その声を聞いて、二人はようやくレベツカのほうを見た。

「おお、レベツカ」

まとめた書類を小脇に抱えて立ち上がったのは、色黒で太鼓腹の小柄な男。マイケルズだ。

気さくな笑顔を見せたこの中尉は、レベツカ達の所属する部隊の長でもある。部下からの信頼は厚く、レベツカもその例に漏れない。

「ちよいと遅かったな、話し合いは終わっちまったぞ？」

「え？ も、申し訳ありません」

「なあに、気にすることはないさ。俺の分はもらっていくぜ」

そう言つてマイケルズはひよいとカップの片方を取り上げた。

松のこぶのような手の動きを無意識に目で追っていたレベツカは、彼の視線を受けて我に返った。あたふたと姿勢を正し、カップをテーブルに置く。

「どうぞ……」

黙ってレベツカを見ていた細面の男は、不愉快そうに鼻を鳴らすとカップを取った。

座っていても背が高いとわかるが、その身長に釣り合うだけの肉が

ない。

渋滞中に運転手が指先でハンドルを叩くように、一定の調子でテールの天井を叩いていた。

「そんじゃ大佐、私らはこの辺で。レベッカ、行くぞ」

「は、はい。失礼します、ゴウエン大佐」

痩せた長身の男　ヴィンセント・ゴウエン大佐が、早く出て行くようレベッカに命令する。

その声がひどく鬱陶しそうだったのを受け、レベッカは逃げるようにテントを後にした。

「なるほどな、カードに負けてお茶くみを押し付けられたか」

茶を運ばされたいきさつを本人から聞かされ、マイケルズは豪快に笑った。隣のレベッカが尖らせた唇を盆で隠す。

「私、あの人は苦手だな。気難しそう」

「生意気な口を叩くな。相手は上官だ、敬意を持って接しろ　と、一応は言っておこう」

実は俺も同感だがな、と頷いてみせるマイケルズ。彼よりはわずかに低い位置にあるレベッカの頭に手を置き、

「まあ、本人の前では言わないこつた。それ以外なら許すけどな」  
そう言つて白い歯を見せた。きょとんしていたレベッカも、それに釣られてくすりと笑う。

軍人でありながら、マイケルズには上下関係を軽んじるところがあつた。

部下の礼儀作法はまるで気にせず、自分に対しての敬語は使わないことを奨励している。間違いなく軍人としては最低の男だ。

しかし彼には人望がある。上も下もなく人と付き合うその姿勢が、部下の心を掴んでいるのだ。レベッカは一人結論した。

「んー？　どした？」

「何でもないよ。それより、何の話し合いだったんだい？」



「この間のことについてだな」

マイケルズは脇に挟んでいた書類をレベッカに手渡した。

見て良いのかと聞かれ、当然のように首を縦に振る。左上にひもを通して束ねた紙をレベッカが数枚めくり、

「……ああ、この間みんなで調べてきたやつか」

「そう。強いロック鳥の居場所を知っていそうな、腕のいい飛行機乗りのリストだ」

そこには飛行機乗りの名前と簡単な情報が書き連ねられていた。

表の中から、レベッカは自分が調べた飛行機乗りの名前を探してみる。

ステファニー・ランデルマンという女性を調べてきた者は、自分の他にも何人かいるようだった。

「まとめてみると、どこで調べても挙がってくる名前はある程度同じだってことがわかった。」

同業者すら認める腕利きの飛行機乗りってことだ。俺達はそういった接触を取り」

「ロック鳥の居場所を聞き出すというわけだね。」

言いたいことはわかるけど……兵器開発部所属の軍人がする仕事ではないよね」

「それを言ったら、聞き込みだって技術屋の仕事じゃないさ。今更そんなことを言っても始まらないだろ」

取っ手に通した人差し指を軸にカップをくるくる回していたマイケルズが、ふいに立ち止まって首を回した。

彼の見つめる先に、遠目にもそれとわかる大砲がある。

草原の地面に土台が固定されているものの、砲身は自由に旋回し、角度をつけることも可能なようだった。

砲塔が二門水平に並んだデザインといい、あちこちの展望台に設置されているような双眼鏡に良く似ている。

「慣れない仕事だが、頑張ろうじゃないか。」

あれを使ってロック鳥を倒すためにな」  
双眼鏡の化け物を指差し、マイケルズが言う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4781b/>

---

ロックバード      空を奪われた翼

2010年10月12日15時29分発行